

## 災害から学ぶには

藤吉洋一郎\*

毎年痛ましい土砂災害が起きる。がけ崩れ、地すべり、土石流とそれぞれに応じた対策がとられているのに、いっこうに後を絶たないのはどうしてだろうか？ そればかりか、自然はまるで人間の力を試すかのように、次々と新しい課題を投げかけるため、未解決の課題が山積している。

\*

最近の例でいうと、去年8月14日の神奈川県山北町の玄倉川でのキャンパーの遭難事故とか、6月29日の広島県を中心とした土砂災害、また一昨年には……。いや数え上げればきりが無い。

玄倉川は、災害の形態としては土砂災害というよりは洪水そのものだが、大勢のキャンパーが入り込んでいた背景には、一見するとキャンプに適したように見える広い河原が、実は砂防堰堤でせき止められた土砂や岩石の集まりであったにもかかわらず、そのことの持つ意味が理解されていなかったことがあげられる。もともと、大雨になると増水して土石流が発生する危険がある場所だから、砂防堰堤があるのであり、そこがすでに埋まっているということは、これまでに何度も大きな土石流が発生したことを物語っているのだ、というように考えた人がキャンパーの中にどれだけいたのだろうか？

玄倉川では、最近のアウトドア指向で人気が高まっている河川空間の利用のあり方と、それを誰がどのように管理していけばいいのかという課題を投げかけられた。また、広島土砂災害では、記録的な大雨でにわか土砂災害の危険が高まったときの緊急避難ができるように、リアルタイムでの土砂災害の危険度判定が必要だとか、そもそも危険な個所に住宅を建てること自体をもっときちんと規制すべきだといった反省が求められ、新しい法律を作るきっかけにもなった。

\* NHK解説委員  
(財)砂防・地すべり技術センター理事

マスコミは常にそうした新しい課題の発掘には大変熱心である。確かに、それが問題解決のインセンティブになってきた側面は大きいだろう。しかし、いつもいつも新たな課題を見つけるばかりでいいのだろうか？ それまでの努力が実って災害を切り抜けたというような、もっと前向きな情報はないのだろうか？

私はないのではなく、そうした視点が欠けているために見つけていないのではないかと思う。マスコミには、被害の報道に力点を置くあまり、被害を受けた人の方に関心が集まってしまう性癖がある。被害の再発を防止するには、どうやって難を逃れたかという情報の方が役立つかもしれないのに、そうした情報はほとんど省みられないでいる。たいていの災害では、被害を受けた人よりも、むしろ難を逃れた人の方がたくさんいるはずなのに。

\*

かねてからそうした疑問を持っていたら、砂防・地すべり技術センターが、平成10年度に佐渡島で行った土砂災害の聞き込み調査の話を目にした。

一昨年の8月4日、新潟では午前7時から8時までの1時間に113mmの雨量を記録した。明治30年以来、100年ぶりの大雨だったという。明治30年には死者50人、家屋の全半壊576戸という大きな被害だった。ところが今回は、土石流24箇所、がけ崩れ10箇所、地すべり12箇所の土砂災害が発生し、家屋などへの被害も全壊3戸、一部破損20戸、床上浸水20戸、床下浸水46戸といった大きな被害に遭いながら、人的な被害は皆無だったというのである。

このうち、山と海岸に挟まれた過疎地域の一つ、両津市東立島地区では、2級河川の東立島川が土石流で氾濫した。また、同時に裏山が崩れて民家2戸が押しつぶされたほか、12戸あった集落のうち10戸までが被災した。

聞き込み調査によると、夜中から、雨の降り方がただならぬ様子であった。このため地元の区長さん

たちは、未明から起き出して外の状況を見回っていた。山腹から水が湧き出ていた。普段は水が流れていない山ひだにも水が流れ出していた。そのうち、家の前の側溝が溢れてくる。町の中央を流れる川の水位が上がって、溢れそうになってくる。そうするうちに、裏山が崩れて2軒を押しつぶした。押しつぶされた家の人は、外に

出ていたため無事だった。もはやこれまでと、東立島地区の区長さんは周辺の住民たちに直ちに避難するよう呼びかけ、それによって危うく人的な被害を免れたというのである。

自分たちの住む地域に大雨のときにはどんな危険があるのかをよく知っていたことと、早くから状況の変化を見守っていたことによって、ぎりぎりまで避難をすることができたのである。

集中豪雨に多いケースなのだが、このときのように夜中に大雨注意報が警報に変わり、早朝に被害が発生すると、自治体では十分な対応ができない。勢い、避難の判断は住民自らの判断に任されることになる。また、被害が起きてからは、道路があちこちで寸断され、現場にたどり着くこと自体が大変困難になる。しかも、海岸にまで山が迫っているような地形では無線の通りも悪く、このときも消防無線が使えなかったと言う。



東立島川で発生した土石流により人家の2mまで土砂に埋まった  
(両津市東立島地内) —新潟県砂防課提供

\*

このように物的な被害は大きかったが、人的な被害はなかったというケースには、こうした避難がうまくいったという実績が隠れている。そういうこと

を知らされる機会は、実はこの前にもあった。

1995年の7月11日から12日にかけて、梅雨全線が停滞して、長野、富山、新潟の3県境を、200年に1回あるかないかというような集中豪雨が襲った。各地で大きな被害を受けた典型的な梅雨末期の集中豪雨である。ところが奇跡的なことに、それほど

の集中豪雨で、1人も犠牲者がなかったのである。

1996年の暮れに14人が死亡した蒲原沢の土石流災害が起きたのは、この災害復旧工事中のことであった。私は、どうして人的な被害がなかったのだろう、と疑問に思っていた。そしたら、その2年後に、最も被害が大きかった長野県小谷村の村長さんから、自分たちで作ったと言う災害の記録集が送られてきた。被害状況を記録した写真や、住民の体験談の投稿が載っている記録集である。

小谷村というのは、長野県の最北西端の新潟県境の高い山脈に挟まれた川沿いに集落が点在する、人口4300人あまりの過疎の村。冬のスキーと山歩きなど年間に200万人が訪れる観光の村。一昨年の冬季オリンピックの会場の一つとなった白馬村の北隣。私は、その記録集を読んで初めて、住民たちが危機一髪で難を逃れた様子が、さまざまな場面であったことを知らされた。

がけ崩れ、地すべり、土石流がいたるところで発生し、道路も鉄道もずたずたに寸断され、家も田畑も失われたところも。通信手段も失われ集落ごとに孤立して相互の連絡がつかなくなったため、役場の対策本部でも状況がつかめなかった。交通も通信も

途絶して外部との連絡がつかないまま、各集落の住民たちは、大雨の降り方や川の増水の様子などから、ただならない状況と判断し、自主的に避難して、かろうじて難を逃れることができた。なかには、山間にある“塩の道”などを經由して避難したり、発電所の導水管伝いに高い位置まで避難した旅館の宿泊客らもあった。

塩の道とは新潟県の糸魚川など海と長野県の松本など内陸とを産物を運んで行き来した、古い時代の交易路。現代の国道など自動車の走る道路は洪水で寸断されたが、人がやっと通れるほどの塩の道は災害にも強かった。

この小谷村の例も、先ほどの佐渡島の例も、住民の日頃からのコミュニケーションと、地域がどんな災害に遭いやすいのか、そのような場合にはどこへどう避難すればいいのかなど、地域の特性をよく知っていたことが、適切な対応につながった。

われわれマスコミはどうも被害の後追いに追われて、こうした難を逃れた人々の体験談のような、本当はもっと役立つ情報を見逃してしまっているきらいがあると反省している。若い取材スタッフにも機会があるごとに、そうした視点を持つように指導するよう心がけている。

\*

小谷村の現地を2年後に見たとき印象に残ったことなのだが、コンクリートで固めた護岸に土を盛り、さらにその上を自然の石で覆う工事をしていた。できるだけ自然の川に近づける工夫だろう。このように最近では砂防ダムにもさまざまな工夫が見られるようになった。

砂防ダムは、土石流の流れをくい止めて被害を軽減するのが目的だが、土砂だけでなく魚の上り下りをも遮断するとして、釣り人には大変人気がない。小谷村の復旧工事では、大きな岩だけをくい止める隙間のあるダムとか、眼鏡橋のような大きな穴の開

いたダムも試みられていた。また、ブロックを積み上げただけで隙間から水や砂が通りぬける構造のダムも考えられている。こうしたものなら小さな魚は上り下りできるかもしれない。釣り人の批判に応じて工夫をすれば、いろいろなことができるのだと感心した。

\*

小谷村の被災地を見て歩いて気付いたことをもう一つつけ加えると、災害前に砂防施設が整備されていた川の下流では、ほとんど被害がなかったり、起きても比較的軽かったことである。これは当然といえばそれまでだが、なかなかそのように素直に評価してもらう機会が少ないのが実状ではないだろうか？ 役に立って当たり前であって、万一役に立たなければ大問題にされてしまう。それが公共事業の宿命なのかもしれない。さすがに地元のみなさんはそれを自覚するようになり、これまで自然のままの姿に手を付けたくないと砂防対策を拒んできたというペンション村でも、この災害のあとでは砂防対策が進められていた。ここにも課題追及型というか、そうしたマスコミの発想法の弊害が波及していたのだ。

\*

過疎の村に災害の追い討ち。住民はどう受けとめているのだろうか？

「住民の結び付きを日頃は煩わしく感じていたのに、危急の事態でそれが大変役だったことを見直した。地域を愛してみんなで守ってきた人々のつながりを、これからも大切にしたい」という大阪から嫁いできた女性の体験談が印象的。まだ復旧工事が続いている最中であつたが、みなさんの表情は大変明るく、災害にあつたことを理由に村を離れた人がまったくいない、というのも大変嬉しいことであつた。